



The 21st Annual Congress of Japanese Society for Quality and Safety in Healthcare

第21回医療の質・安全学会学術集会

教育セミナー11 (ランチョンセミナー)

日時 2026年 **11月8日(日)** 12:00~12:50

会場 第**6**会場 アクリエひめじ 1F メインスタジオ

〒670-0836 兵庫県姫路市神屋町143-2

モニターアラーム管理の実践： 偽陽性削減から安全文化の醸成まで

座長 **本間 崇** 先生

善仁会グループ 相談役

演者 **北方 基一** 先生

市立伊丹病院 医療技術部 臨床工学室 主任

本セミナーは事前申込制です

詳細は学会ホームページをご確認ください。

<https://convention.jtbcom.co.jp/21jsqsh/index.html>

共催：第21回医療の質・安全学会学術集会
フクダ電子株式会社

教育セミナー11 (ランチョンセミナー)

モニターアラーム管理の実践： 偽陽性削減から安全文化の醸成まで

北方 基一

市立伊丹病院 医療技術部 臨床工学室 主任

生体情報モニターのアラームは、患者急変を早期に察知するための重要な安全機能である。一方で、臨床現場では多数のアラームが日常的に発生しており、その多くは偽陽性である。過剰なアラームはスタッフの注意力を低下させ、真に対応すべきアラームへの反応遅れにつながる可能性がある。いわゆるアラーム疲労は、個人の注意力や努力だけで解決できる問題ではなく、現場運用、教育、データ活用、組織的な管理体制を組み合わせる取り組みが医療安全上の課題である。

本セミナーでは、当院におけるモニターアラーム削減の取り組みをもとに、偽陽性アラームを減らし、急変を見逃さない体制を構築するための実践について紹介する。まず、モニター関連事故の背景とアラーム疲労の問題を整理し、当院のアラーム発生状況から、現場で何が起きているのかをデータに基づいて概観する。次に、偽陽性アラームの主な原因として、不適切な誘導選択、不適切なアラーム設定、送信機設定やセンサ装着の問題などを取り上げ、心電図波形やSpO₂波形、リコール画面を用いた具体的な見分け方と対応方法を解説する。

さらに、アラーム対応が病棟の日常業務として継続されるための仕組みとして、チェックシート、アラームサマリー、モニタリング手順書の活用について述べる。加えて、多職種で構成されるモニターアラームコントロールチームによるガイドライン整備、装着基準の明確化、デフォルト設定の見直し、定期的な教育とデータ共有の取り組みを紹介する。

モニターアラーム管理の目的は、単にアラームの数や音を減らすことではない。偽陽性を減らすことで、真に対応すべきアラームを埋もれさせない環境をつくり、現場が安心して患者状態の変化に気づける体制を整えることである。本セミナーがアラーム管理の実践の手がかりとなれば幸いである。